

カンキツ幼果期でのカメムシ類の集中飛来による被害と対策

農業研究センター 果樹研究所 病虫化学部

担当者：行徳 裕

研究のねらい

カンキツ園でのカメムシ類の被害は、果実が着色を始める頃から発生するのが一般的である。しかし、前年の秋期に異常繁殖したり、台風被害で山林にカメムシ類の餌が極端に少なくなると、カンキツ園の幼果に集中飛来することがある。これは、戦後、スギ、ヒノキの植林が進み、樹齢が進んできたことによる新しい現象で、今後は、着色期での被害と同様に果実の幼果期でも対策を考える必要がある。このようなことから、カンキツ幼果期での集中飛来の原因と対策を検討した。

研究の成果

1 発生原因

- (1) 平成4年の集中飛来は、前年の秋(9月27日)に気象災害の記録に残る台風19号が襲来して、山林でのカメムシ類の餌が極端に不足したことによると考えられる。
- (2) 平成8年の集中飛来は、前々年(平成6年)が記録的な大干ばつであったためスギ、ヒノキでの花芽分化が促進され、平成7年のスギ、ヒノキの球果が大豊作になったことから、これを餌としたカメムシ類が秋期に異常繁殖したものと考えられる。

2 被害と対策

- (1) 平成4年の集中飛来は、県内カンキツ産地1ヶ所だけであったが、平成8年は県下全域のカンキツ園で発生した。
- (2) 発生時期は、6月中・下旬から始まり7月上・中旬に最盛期を迎え、7月下旬～8月上旬にはほとんどが終息した。
- (3) 発生は、カンキツ類すべての品種に見られ、特に早生温州や清見で被害が多かった。
- (4) 集中飛来による被害は、果実の吸汁痕と落果が最も多く、その他、落葉、枝枯れが主なものである。
- (5) 対策としては、合成ピレスロイド剤であれば水和剤、乳剤、粉剤のいずれも散布効果が高く、1週間は残効がある。

普及上の留意点

薬剤散布後雨があると効果がなくなる。また、カメムシ類は主として日没後に飛来するので、夕方または早朝に散布する。

表1 カメムシ類の越冬とヒノキ球果の着果状況

項目	平成8年	7年	6年	5年	4年	3年
カメムシ越冬数*	130	2	14	5	29	-
ヒノキ球果数**	少	1,025	304	891	496	893

*熊本県病害虫防除所調査 **九州林木育種場調査

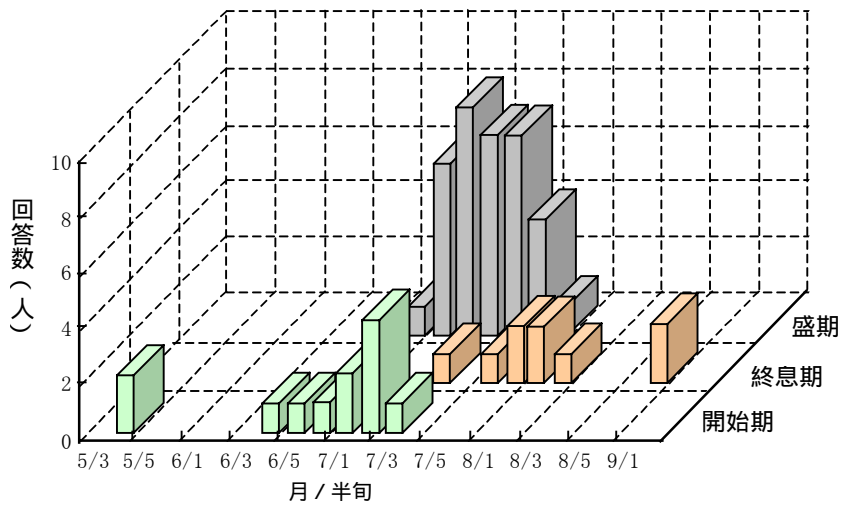


図1 カメムシ類異常飛来の開始期・盛期・終息期
集中飛来を受けた農家12戸に対するアンケート調査結果

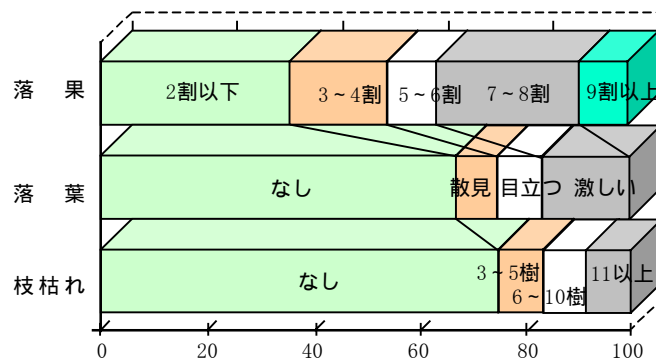


図2 カメムシ類の異常飛来を受けた園での被害状況